

貝から始める探究活動

令和4年2月8日の朝日新聞の科学欄に、ビノスガイのことが掲載されていました。岩手県の船越湾で135年も長生きして、東日本大震災の津波で死んだビノスガイという二枚貝が見つかったという内容です。この貝の貝殻には年輪が刻まれるので、年輪を解析すると貝の年齢が分かります。そして、最後の年輪は2010年にできたものであったことから、2011年の東日本大震災の津波で死んだ可能性が高いと結論付けたということでした。インターネットを検索すると、研究を担当している神戸大学のホームページにはさらに詳しい内容が掲載されていて、ビノスガイの化石は地上からも見つかることもあることから、貝殻の化石の状態を詳しく研究していくと、日本の古環境の研究に役立っていくのではないかと期待が記載されています。

小石川の生徒の皆さんの中に、フィロソフィーの研究で「貝」を取り上げたいと考えている人はいませんか。「小学生の時に家族で潮干狩りにいったことがある」とか、「ホタテの貝殻を砕いてつくった白い道が、インスタ映えで有名な観光スポットになったと聞いた」など、貝は身近な存在ですので、皆さんの中にはきっと貝をもっと調べてみたいと考えている人もいるに違いありません。

さて、今年度の都立中高一貫教育校の適性検査Ⅰでは、「貝」を題材にした文章が出題されました。盛口満氏「自然を楽しむ一見る・描く・伝える（東京大学出版会）」からの文章です。盛口氏は博物学を専門としている科学者で、沖縄大学学長でいらっしゃいます。出題された文章には、盛口氏が少年時代に千葉県で海岸で拾った二枚貝の貝殻の中に、千葉県では現在生息していないハイガイという貝を見つけたことが書かれています。生息していないのにもかかわらず、ハイガイの貝殻を千葉県の海岸で見つけたのはなぜか。盛口氏はその理由を、海水温の高かった縄文時代の地層から、ハイガイの貝殻が洗い出されて海岸に打ち上がっていたからと考えました。このことに気付いた盛口氏が、貝殻拾いのあらたなおもしろさに気が付くという内容です。

適性検査Ⅰでは「カラス」を題材にした松原始氏「科学者の目、科学の芽（岩波書店）」の文章も、盛口氏の文章とセットで出題されていて、こちらは筆者が若い時にカラスに鳴き真似をしたところ、カラスが鳴き返してきたと思われる経験が述べられています。小石川の生徒の皆さんの中には、二人の生物学者のように、小学生の時に経験したことがベースになって、大人になってから新たな視点に気付いて、研究を進めていく人がいるかもしれません。また、「フィロⅢ」や「フィロⅤ」で研究テーマとして選んで、いろいろ調べて考えたことが、大学生や大学院生になってから、新たな視点に気が付いて研究していくことあるかもしれません。多くの人は、子供の時や若い時に感じた興味、関心を、成長していくにつれて忘れていってしまいます。忘れなくても、興味、関心を抱いたことを、さらに探究して知識を深めたり、思考したりする時間やチャンスがありません。小石川はそうしたことができる数少ない学校であるように思います。

135年も生きたビノスガイは、貝が20歳の時に発生した明治三陸地震、57歳の時に発生した昭和三陸沖地震の津波を生き延びましたが、そうした貝でさえ、東日本大震災の津波を生き延びることができなかったと新聞記事にありました。貝殻が私たちの想像もつかない何かを知る手がかりになるかもしれない、そんなことを感じました。